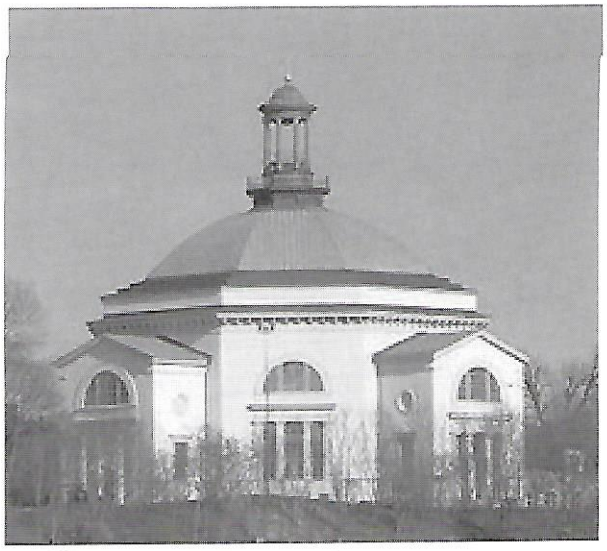
話題の中心は、「クラシック離れ」と「アコースティック楽器離れ」

今回の大会の特徴的な仕掛けは、発表者が一方的にプレゼンテーションを行うだけでなく、大会企画の特徴的な仕掛けとして、参加者全員を10名ほどのグループに分けてのグループ・ディスカッションや、客席からの発言に多くの時間を設定したパネル・ディスカッションが行われ、参加者全員に発言の機会があることだった。筆者もグループ・ディスカッションではスウェーデンの初歩レベルのピアノ教師たちが過半数を占めるグループに入り、また、パネル・ディスカッションではスウェーデン、ドイツ、アメリカの大学教員とともにパネラー役となり、各地のピアノ教師たちの生の声を聞くことができた。

そのなかで分かってきたのは、「ピアノ離れへの危機感」というフレーズから私たち日本人が連想するのは、まず第一に「少子化」による「ピアノを学ぶ人の減少」ということだが、この大会では「少子化」や「生徒の減少」はほとんど話題にならず、その代わりに「クラシック離れ」「アコースティック楽器離れ」が問題となっていることだった。つまり、「ピアノ離れ」とは、「ピアノの学びはクラシック音楽の学びである」という当たり前のことが当たり前でなくなっていることだった。

この大会では、大会初日に参加者にアンケートが配られ、その結果にもとづいて最終日のパネル・ディスカッションは推移したのだが、そこでの質問項目を要約すると次のようになる。

1. グループ・レッスンの有効性
2. デジタル・ピアノとアコースティック・ピアノ
3. 生徒のクラシックなレパートリーへの興味
4. インターネットから生徒が曲を学ぶこと
5. 生徒が楽譜よりもコピー譜を用いること
6. 教えるジャンル――楽譜から学ぶクラシック音楽(芸術音楽)／クラシック音楽の即興演奏(芸術音楽)／ポップ・ミュージック・アレンジメント／耳から弾く音楽スタイル(ジャズ、ポップなど)



大会の会場となったエリック・エリクソン・ホール

このなかからパネル・ディスカッションで話題の中心となったのは3と4の項で、とくに3については「あなたの生徒はクラシック音楽のレパートリーに興味を持っているか」という問いに対して、「強く持っている」が3割程度という意外な(正直な?)結果が出ていた。

これに対して興味深かったのは、「すべての音楽の基本として、まず最初はクラシック音楽から始めるべきだ」という意見はほとんど出ず、「入門段階から、クラシック音楽もポップ・ミュージックも教えていこう」という論調が強かったことだった。

4の項目、インターネット、たとえばYouTubeから曲を学ぶことについても、意外なことに、「YouTube でアップされている演奏は、正統性を持つかどうかのチェックがされていないのが問題だ」というパネラーの発言に対して、客席からはほとんど反応がなかった。クラシック音楽が自国の音楽であるヨーロッパの人々にとって、演奏の正統性などというものはチェックなどなくてもおのずから分かるもので、関心を示す対象ではないのかもしれない。

こうしてなごやかなうちに多くの言葉が飛び交った第34回国際大会は、ストックホルムの中心から南へ少し下ったシェップスホルメン島にある国立美術館の近くに建つエリック・エリクソン・ホールで行われた。エリック・エリクソン・ホールはかつて教会だったというほぼ正方形の建物で、その居心地も音響も良い内部空間にヤマハからグランド・ピアノ2台とデジタル・ピアノ数台が用意されていた。市街地とこの島は橋でつながっているが、最終日の前夜には、参加者全員が船に乗って、ノーベル賞授賞式のパーティーが行われることで名高い市庁舎へ向かい、ストックホルム市主催のディナー・レセプションに与った。